

運動機能に障害を有する女性の衣生活の現状と課題

川端 博子*

キーワード：肢体不自由な女性、衣服サイズ、衣服への関心、機能性、評価基準

1. はじめに

身体障害者手帳交付台帳登載数からの推定によれば、平成13年度の身体障害者数(18歳以上)は約352万人であり、肢体不自由な者が54%を占め、その数は近年増加の傾向にある⁽¹⁾。障害の状況や程度が個々に異なること、購買力が低いなどの理由から、衣服市場のターゲットになりにくい現状である。しかしながら、352万もの人が存在している現実を直視し、超高齢社会において数の増加が見込まれるため、今後様々な角度からの支援が必要である。

一方で、福祉分野への市場の拡大や起業が話題になっている⁽²⁾。各社から出されている介護衣料のカタログを調査したところ、機能面に工夫がみられるものの、デザイン面での配慮が少ないことを感じる。注文で請け負う例がインターネットなどで紹介されているが、気軽に依頼できない、イメージの意思疎通を図るのが難しい、既製服に比べ高価であるという点からなかなか普及していかない。提供する側も利益の追求が困難なため、ボランティアで活動するケースが多い。

リハビリテーション医学で用いられるADL(日常生活動作)評価のうち、更衣動作が全体項目の約1/9～1/6を占めている。更衣は、

姿勢をかえ、粗な運動から細かな運動へと動きの質を変えていく動作であり、一般に移動や食事動作に比べて、得点の低い症例が多いことが報告されている⁽³⁾。リハビリにおいては、更衣を困難にしている内容を把握し、治療や訓練により軽減する、自助具を使うなどの方策がとられている。看護・介護分野では、介助のしやすさを含めた工夫がなされているように感じる。被服学の分野では、高齢者を対象に、衣服の材質、ゆとりと形態、開きや留め具に工夫をするなどの研究⁽⁴⁾や、服装関心を高めて衣生活の自立範囲を高めるファッション・セラピーの事例⁽⁵⁾などが報告されている。

障害の程度が千差万別なため、1つの試みがある対象者への改善になっても、別の対象者にあてはまらないことも多く、今後事例を積み上げさまざまなケースに対応していくことが望まれる。介護衣料のカタログで感じたのは、品数が少なく、掲載される製品は着用者の衣服への想いを配慮しておらず、いわゆる「機能服」としてとらえられていることである。衣服をまとことは自己を表現することである。服の購入や好きな服を着て外出することは楽しみであり、殊に女性においては生活の中で高い関心を抱くことの一つであろう。

ここでは取り組みの第1歩として、衣生活の購入実態と意識を調査し、それらをもとに改善への方向性を見出したいと考えた。本研究では、

* 埼玉大学教育学部家政教育講座

運動機能に障害があるという共通点の中で、
 (1) 衣服購入の現状とその時に感じる不便、
 (2) サイズと機能面に抱く要望、(3) 衣服への
 関心度に関するアンケートをもとに、衣生活の
 現状と取り組むべき課題点をまとめた。

2. 方法

調査時期は2001年12月～2002年6月の間であ
 り、授産施設、療護院、救護院、障害者スポー
 ツセンター、病院(外来)、作業所を訪問し、聞き
 取りとともに、郵送法でアンケートを回収し
 た。本人から直接の回答が全体の95%であり、
 その他は家族・介助者の記述である。

質問項目は、(1) 属性4項目(年齢、居住地、
 職業、同居状態)、(2) 障害の程度、年数、種類
 と身体部位、左右差、器具・装具の利用に関す
 る身体的特徴に関わる6項目、(3) 衣生活自立
 について7項目(4) 外出の頻度(3項目)、一
 緒に行く人(MA回答)、衣服を買いに行く理由

(7項目)/行かない理由(10項目)と、外出時
 に感じること(8項目)、(5) サイズに関する質
 問(上衣と下衣のサイズ、サイズに関する意識
 (8項目))、(6) 衣服関心度と衣生活行動(14
 項目)と評価基準(10項目)である。具体的な
 質問項目と回答の尺度は結果の項に記載する。

3. 調査対象者の特徴

調査対象者は、肢体不自由な女性187名(18～
 69歳)である。対象者の特徴を表1～3にまと
 めた。年齢構成は年齢が上がるにつれて人数が
 多くなる「障害者の高齢化」に概ね対応してい
 る。85.5%が東京都内の居住であり、全体とし
 ては公共交通機関が比較的充実した地域に生活し
 ているとみなされる。

障害の程度と種類を表2に示した。障害の程
 度は、1級(41.7%)、2級(20.9%)の割合と
 なっており、障害の年数は、「生まれた時から」
 と「21年以上」で全体の半数近くを占めている。

表1 調査者の属性

年 齢	人数		居住地		職 業		同居状態 (複数回答)	
	人数	(%)		(%)		(%)		(%)
18～29歳	17	9.1	多摩地区	69.5	フルタイム	20.5	一人	14.4
30～39歳	16	8.6	東京都区内	16.0	パートタイム	20.0	配偶者	56.1
40～49歳	31	16.6	関東地区	7.5	(含作業所)		親	18.2
50～59歳	51	27.2	その他	7.0	なし	59.5	子	15.5
60～64歳	32	17.1					兄弟姉妹など	12.8
65歳以上	40	21.4					施設入所	9.1
計	187	100.0		100.0		100.0		

表2 障害の程度・年数・補助具

障害の程度	人数		年 数		障害の種類		障害の部位	
	人数	(%)		(%)		あり (%)		あり (%)
1 級	78	41.7	1 年 未 満	1.6	変形性関節症	23.1	上肢障害	47.7
2 級	39	20.9	1 ～ 2 年	5.4	リウマチ	22.6	下肢障害	98.9
3 級	18	9.6	3 ～ 5 年	12.0	脊椎損傷	13.4		
4 級	17	9.1	6 ～ 10 年	16.3	脳性麻痺	12.9	左右差	
5 級	11	5.9	11 ～ 20 年	17.4	脳血管障害	9.7		
6 級	3	1.6	21 年 以 上	23.9	その他	18.3		
7 級	1	0.5	生まれた時から	23.4				
なし	5	2.7						
不明	15	8.0						
計	187	100.0		100.0		100.0		

表3 器具・装具の利用度

種類	件数	(%)
*車椅子	87	46.5
*杖	75	40.1
尿取りパッドやおむつ類	26	13.9
*短下肢装具	14	7.5
*松葉杖	11	5.9
コルセット	8	4.3
頸椎カラー	5	2.7
*歩行器	4	2.1
*長下肢装具	3	1.6
採尿器	2	1.1
*義足	1	0.5
その他	20	10.7
なし	37	19.8

*は歩行に関するもの

下肢に障害ありが98.9%、上肢に障害ありが47.7%を占めており、障害の種類は多岐にわたっていた。日常的に使っている装具や器具として、車椅子(46.5%)、杖(40.1%)、短下肢装具(7.5%)が挙げられた。以上のような身体的状況から、購入や着脱など衣生活への支障と困難が予想される。

4. 結果

4.1 衣生活の自立度

衣生活に関わる自立の程度を図1にまとめた。全項目を「容易にできる」とする者はおよそ3割であった。全体の8割程度は「自力でできる」と答え、残りは介助を受けていた。ほぼ全員がその日の服を自分で選んでおり、8割が主に自分で衣服を購入し、3割は洗濯・手入れで介助を受けていた。

4.2 外出と衣服の購入

『外出が好きですか』の問いには166人、9割近くが「好きである」と答えており、障害の程度や年数の如何にかかわらず外出を好む傾向であった。「好きでない」と回答した者は16人で、食料品などの日常的な買い物に出かける頻度も少なかった。衣服の買い物に同行する人は「1人で」(55%)に続き、「配偶者」(29%)、「親

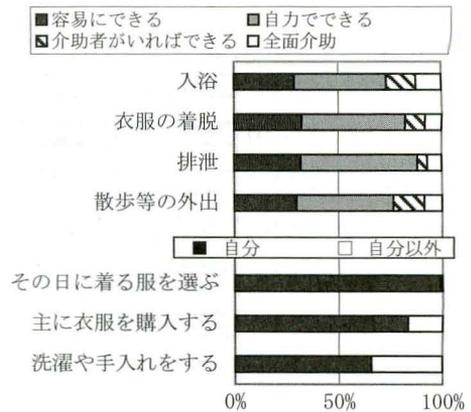


図1 衣生活に関わる自立の程度

(16%)、「兄弟姉妹」(12%)の順であった。家族の協力が浮き彫りになり、ヘルパーとボランティアの協力は9%と少数であった。

『衣服を見たり買いに行ったりしますか』の問いに、「ほとんど行かない(買ってきてもらう)」と答えた者は18人にすぎなかった。外出が好きでなくても、「衣服を買いに行く」が11人(69%)いたのに対し、外出が好きであって「衣服をほとんど買いに行かない(買ってきてもらう)」とした者は13人(8%)とわずかであった。

図2には、「衣服を買いに出かける」と回答した人の理由を割合の多い順に記載した。買いに出かける理由として「自分で決めたいから」、「気に入った服を買うため」が最も多く、衣服への関心・積極性が高いことと、服の好みや不具合を伝えるのが難しく人に任せられないと考えていると思われる。また、「気晴らしになるので」、「ショッピングが好きだから」の割合が高いことから、衣服を買うことは楽しみであることが明らかになった。

また、買いに行かない理由として、「買ってきてもらうので必要ないから」、「人混みだから」、「道路や駅に段差があるため」、「車や道路が危険なため」の肯定割合が高かった。続いて、「外出着を着る機会がないから」、「障害が重いから」、「おしゃれをする機会がないから」の割合

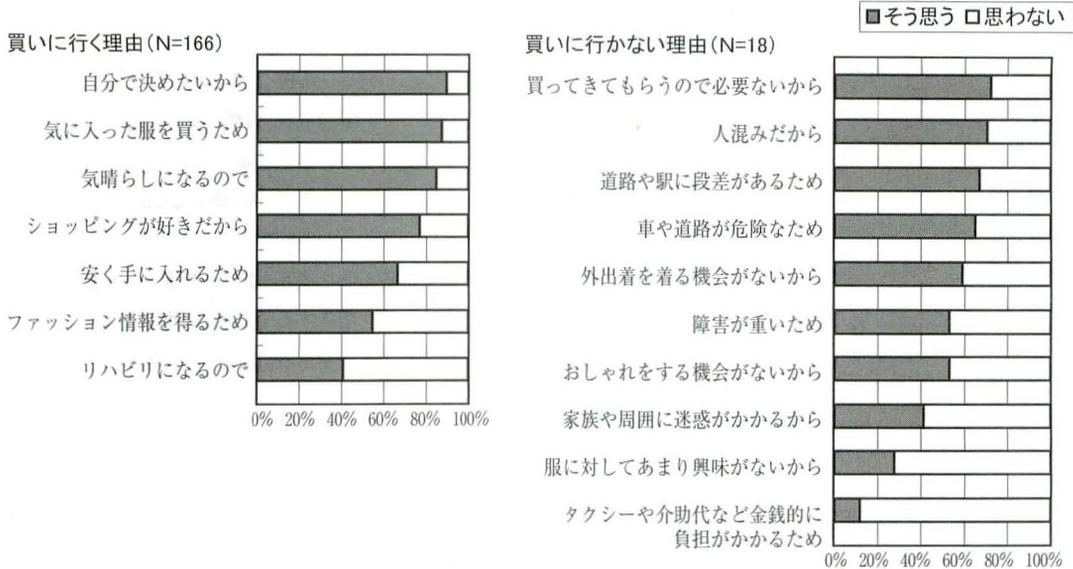


図2 衣服を買いに行く理由と行かない理由

が高いことは、物理的障壁と機会の制約が関係しているととらえられる。しかし、「服に対してあまり興味がないから」と「金銭的負担がかかるから」には否定的な傾向であった。

『衣服を買いに外出する時に感じること』の回答を図3に示した。「店内で困ったとき、自ら販売員や周囲に助けを求める」、「外出時に人から見られていると思うことがある」の肯定割合が高かった。積極的である一方で、見られていると感じている。ノーマライゼーション定着を目指す流れの中で、心理面のバリアや障害者への態度が問題となり、ユニバーサルな接客についてガイドブックが出版されているが⁽⁶⁾、本調査では売り手側の対応はあまり問題と感ぜられていなかった。しかし、他者の視線を意識していることから、総ての人がそれぞれの立場を理解し、助け合う気持ちを行動に移せるよう学校教育や社会教育の役割が重要となろう。

その次に高い割合となったのは、「店内のトイレや休憩所が利用しにくい」、「段差がある」、「通路が狭い」など店内環境の不備である。店内のディスプレイ、わかりやすい案内、通路の確保、試着のしやすさなど、人へのやさしさを

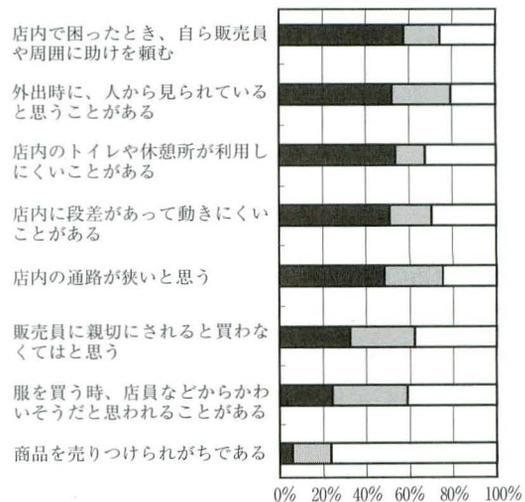


図3 外出時に感じること

心がけた店内環境の整備がこれからの課題である。障害者にも利用しやすいレストランや店舗の情報誌がしばしば発行されているが、買い物全般に関する便、中でも小規模店に関する情報は少ない。商品の選択肢をふやす上でも情報提供は重要である。

以上のように、多くが外出を好み、自分で衣服を選び、買うことを楽しみと考えている。楽

しみを生かすためにも、環境面と意識面での受け入れ体制を整えることの必要性が示された。

4.3 衣服のサイズについて

上衣・下衣ごとに『衣服サイズを範囲表示(S以下～2L以上)で教えてください』の問いに対する回答結果を図4に、サイズとデザインに関する意識を図5にまとめた。

上衣・下衣ともにL以上に比べS以下の割合が少ない。身体サイズを問うていないため、身体と衣服のサイズの関係は明らかでないが、「袖付けまわりや身幅の狭い服は着られないことがある」と「衣服は大き目を着ている」と半数以上が答えていることから、大き目の衣服で対処していると推定される。

また、上衣サイズがMのとき下衣サイズでS以下～2L以上にばらついており、上半身と下半身にサイズが異なる人が多い。「ある部位のサイズが合わなくて不都合を感じる」と「上下のサイズが合わなくて不都合を感じる」では、半数近くが肯定的回答をしており、サイズに不便を感じる人が多いことが伺われた。一方でサイズ揃えの豊富な小売店で選ぶとカジュアルな服種に限られがちになるという声も聞かれた。

しかしながら、「試着をしてから買う方であ

る」では、全体の4割足らずしか肯定していない。着脱が困難、時間がかかる、車椅子ごとに入れる試着室は少数である理由でありきらめている人が多いのかもしれない。「衣服を購入する店は決まっている」(28%)、「なじみの客になって、服のアドバイスやサービスを受けている」(18%)の肯定割合はさらに低い傾向である。

(後述の図6)サイズの不具合を感じている実態から鑑みて、試着のしやすい売り場の環境整備も必要であるが、試着をして入念に選んでいく姿勢を養うことも必要である。

最も低い肯定率の質問項目は、「着脱や着心地を優先し、デザインが気に入らない服を買うことがある」(20%)であった。これはデザインが気に入らなければ購入しないことを意味しており、注目しなければならない点である。

身体サイズの左右差は下肢において多くみられ、43%であった(表2)。左右差においてはリフォームが必要となる場合が多い⁽⁷⁾。しかし、「既製服を直して利用する」は35%余にすぎず、リフォームをせず着用している傾向が明らかとなった。リフォームについては、潜在的ニーズがあるとされながらも利用度が低い現状である。雙田らが指摘するように⁽⁸⁾、リフォームしたことのある者の方で要望が強いこと、家庭の縫製

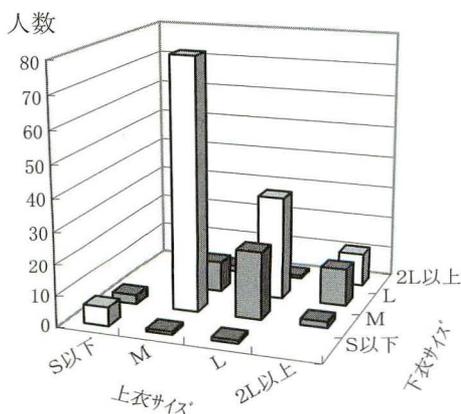


図4 上衣・下衣サイズの人数割合

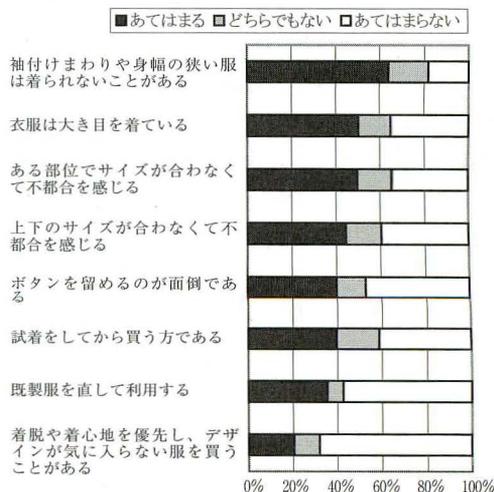


図5 サイズ・デザインに関する回答

技術が低下している現状と併せ、安価に迅速に提供できる仕組みを構築することが1つの解決策である。ズボン丈や袖丈の詰め出しのように簡単なりフォームは普及してきている。幅方向への詰め出しは技術的に難しくなるが、アパレルメーカーにはりフォームを前提とし、縫代を多めにつける、別布を添えるなどの生産体制を検討して欲しい⁽⁹⁾。サイズの不具合は安全性・機能性の低下と関わるため、販売店とメーカーが連携しながら取り組んで行かなければならない課題である。一方で、福祉先進国の例を参考にしながら障害に応じて個別に対応できるシステムづくり、補助金制度も考えていくことが望まれよう。

4.4 衣服への関心と衣生活行動

衣服関心度と衣生活行動に関する回答を図6にまとめた。「外出時にはおしゃれをしたいと思う」(89%)、「行き先やTPOを考えて服を選んでいる」(81%)、「お化粧をする」(71%)、「服をコーディネートしたり、組み合わせを考えたりするのが好きである」(67%)で肯定割合が高かった。また、「身なりや衣服は自分の評価に関わらと思う」(74%)、「おしゃれに着こなすことは自分の生活の中で重要なことである」(63%)の肯定的な傾向から、衣服の着用やおしゃれをすることが潤いと楽しみのある生活の実現と社会への積極的参加につながることを、服をまとうことが自己の存在意識の高まりとかわることが読み取れる。

図6の質問項目を障害の重軽度(1・2級とそれ以外)で分けて比較した。「友人などの服装に関心がある」「お化粧をする」の2項目において、軽度で「あてはまる」の回答率が多い傾向(χ^2 検定、 $p < 0.05$)であったが、その他で違いはみられなかった。着脱の自立と介助を要する人との比較でも差はみられなかった。

以上のことから、障害の程度によって衣服への関心と意識にほとんど違いがないことが確認された。

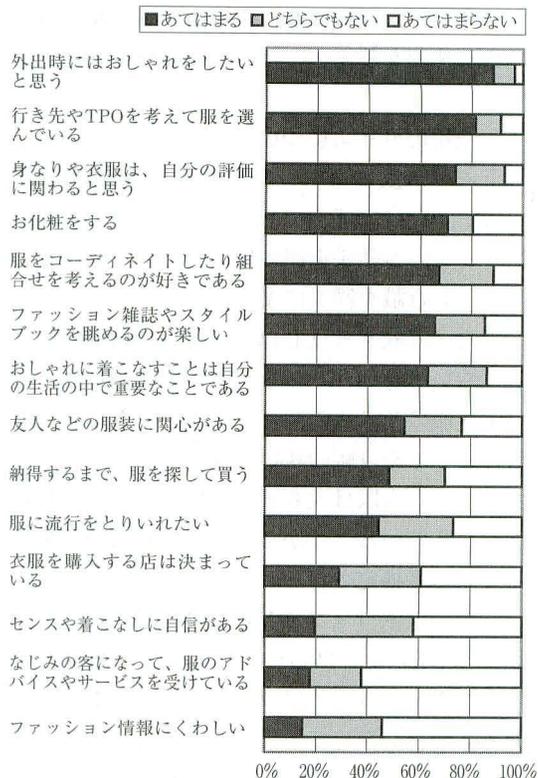


図6 衣服関心度と衣生活行動

4.5 評価基準からみる機能性とデザイン

1996年に実施した女子大学生(247名)の衣服購入時の評価基準の項目⁽¹⁰⁾に、「動きやすさ」、「着脱のしやすさ」、「肌触り」を加えて調査した。『衣服購入時に次の内容は、どれだけ重要ですか』に対し、「1.重要でない 2.あまり重要でない 3.どちらでもない 4.やや重要 5.とても重要」から1つを選択してもらった。表4には平均得点を高い順に示した。

評価基準の平均値から、サイズ、動きやすさ、着脱のしやすさの順に要求が高かった。着脱に介助を要する者の方が、動きやすさと着脱のしやすさの平均値が有意に高かった。第4位に色・柄があがり、1996年の女子大学生と平均値に差がなかったが、スタイル・デザインでは低く有意差がみられた。一般的に加齢とともにおしゃれ関心度は低下するので、30歳未満の人

表4 衣服購入時の評価基準

	今回 (N=187)	女子大学生 (N=247)	t検定
サイズ・フィット性	4.73	4.57	*
動きやすさ	4.66		
着脱のしやすさ	4.56		
色柄	4.51	4.51	
肌触り	4.38		
洗濯	3.57	3.57	**
スタイル・デザイン	4.24	4.60	**
品質	4.20	4.20	
価格	4.49	4.49	**
耐久性	3.68	3.67	

*p<0.05、**p<0.01

(N=17) を抽出して比較すると、サイズ・フィット性=スタイル・デザイン (4.82) >色柄 (4.76) >価格 (4.35) となり、これらの平均値は1996年の女子大学生の値よりも高い傾向であった。

また、図5で「着脱や着心地を優先し、デザインの気に入らない服を買うことがある」に、68%が否定していることとあわせ、今後の課題は、「機能性が高く着心地がよく」かつ「デザインに優れる」をめざしていかなければならない。

既製服の普及によって衣生活は豊かになったが、平均から外れる身体的特性を有する人たちや購買力の低い人たちの要求は満たされていない。サイズの種類をふやすとともに、技術の利用によって個にあわせて提供できる体制づくりが、より多くの人の豊かな衣生活を実現する上で求められている。

5. まとめ

本調査を通じて、服を着ること・選ぶことは機能を満たすだけでなく、楽しみと生きがいにつながる事が明らかとなった。より多くの人が『着心地よく、着脱しやすくかつおしゃれな服を着る』ことができるよう、以下の4点を提言しまとめとする。

- (1) 道路での危険、建物内外の段差や店内の商品配置に不便を感じていることから、気軽

に衣服を探し、見て周りやすい環境を整備し、商品の選択技をふやす。(物理的な障壁の除去)

- (2) サイズ面の不都合が多いため、既製服のサイズ揃えを充実させる。リフォームを施すことで外観面の満足度を高め、着脱の自立や機能性・安全性を向上できるので、リフォームを前提とした製品づくりが求められる。行政においてはボランティアを育成する、リフォームが利用しやすいよう補助金制度について検討する。(販売者・生産者の対応、制度の確立)

- (3) 学校教育や社会教育の中で、障害者との交流の機会を設け、互いの立場を理解し自然に助け合えるよう、社会全体に働きかけていく。また、外出や買い物の便に関する情報が得られるよう行政などが支援し、情報活動を盛んにしていく。(啓発・広報の充実)

- (4) 障害にあわせた機能を有しかつおしゃれな衣服を多くの人々に供給していくために、メーカーや販売店へ具体的な提案を行うことが必要である。このような観点から被服学の研究を進めることで社会に貢献できると考える。(研究・開発の促進)

書く・話すことも困難を有する多くの方々からの協力を感謝します。私の不手際で資料が歳月を経てしまいましたが、実態と要望をまとめることが自身の使命と考え、ここに提示します。

引用文献

- (1) 障害者白書 (平成13年版)、p 3、内閣府編
- (2) 例えば、東島 弘子;『福祉機器の市場と流通』講座・高齢社会の技術5 福祉機器、178~19 (1996) 日本評論社
- (3) 井手 陸、緒方 甫;更衣動作、総合リハ、19 (9) 919~923 (1991)
- (4) 例えば、猪又美栄子、中村亜矢子;高齢女性の袖口ボタンかけはずし動作、家政誌48 (6)、531~537 (1997)

- (5) 泉加代子；要介護高齢者とファッションセラピー、衣服学会誌 50（1）17～22（2006）
- (6) 例えば、ユニバーサルな接客；ユニバーサルファッション商品&売り場開発ハンドブック、36～38、ユニバーサルファッション協会編（2001）
- (7) 千葉桂子；障害者のリフォームについて、日本家政学会 被服構成学部会夏期セミナー要旨集、48～51（2002）
- (8) 雙田珠巳；運動機能に障害がある人の衣生活の現状と課題、日本家政学会 被服構成学部会夏期セミナー要旨、44～47（2002）
- (9) 水谷雅美；リフォームで手持ちの服をもっと着やすく着心地よくしようVたしかな目、国民生活センター、16～18、No. 170（2000）
- (10) H. KAWABATA and N. J. RABOLT；Comparison of clothing purchase behavior between US and Japanese female university students, J. Consumer Studies & Home Economics 23（4）213～223（1999）

(2007年9月25日提出)

(2007年10月19日受理)

Current Situation and Future Assignment in Clothing Life of Women with Upper/Lower Limb Disabilities

Hiroko KAWABATA

Key words : Women with upper/lower limb disabilities, Clothes size, Interest in clothing, Functionality, Evaluative criteria

We made questionnaire surveys on 187 women with upper/lower limb disabilities on their current situation in clothing life and their interest in clothing. The results were as follows:

- (1) Most of the woman with upper/lower limb disabilities liked purchasing clothes and felt pleasure in doing so. However, they were feeling inconveniences in environments both outside and inside the buildings on their outings. Improvements supportive of their outings are desired in the environments of towns and stores.
- (2) Their dissatisfaction level was high for clothing size. Problems exist in the disruption of top-bottom and right-left balance in clothes. The design of clothes sometimes made it difficult for them to put on and take off their clothing. A system that corresponds to easier remake of clothing should be prepared by the manufacturers and retailers in the future.
- (3) High interest in clothes was seen. However, there were few tendencies to give priority to comfort and to wear clothing that they disapproved of the design. Our assignment for the future is to develop clothes that possess both high functionality and good design, to improve environment that allows for easier outings, and to equip better opportunities for abundant selection of goods.